



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第八卷

河出書房版

現代日本小說大系 第八卷

昭和二十五年五月二十五日 初版印刷
昭和二十五年五月三十日 初版發行

代著
表

發行所 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出孝雄

編輯者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
中島健藏

印刷者 東京都港區芝三田豊岡町八番地
川口芳太郎

發行所 東京都千代田區株式會社
神田小川町三丁目八番地
河出書房

會員番號A-11014番
電話神田(25)三一七四番

目次

國木田獨步

源叔父	六
たき火	一七
武藏野	二二
忘れえぬ人々	三三
河霧	四四
富岡先生	五三
牛肉と馬鈴薯	六八

女難		一〇
第三者		一〇四
正直者		一三三
春の鳥		一三三
運命論者		一四〇
巡查		一五八
馬上の友		一六三
晝の悲み		一七三
空知川の岸邊		一七六
非凡なる凡人		一八六
日の出		一九六
號外		二〇八

島崎藤村

舊主人

.....二六

藁草履

.....二五〇

老嬢

.....二七〇

田山花袋

重右衛門の最後

.....二六九

二葉亭四迷

其面影

.....三三三

解説（中島健藏）

.....四五三

國木田獨歩

源叔父

たき火

武藏野

忘れえ

ぬ人々

河霧

富岡先生

牛肉と

馬鈴薯

女難

第三者

正直者

春の鳥

運命論者

巡査

馬上の

友

畫の悲み

空知川の岸邊

非凡なる凡人

日の出

號外

源叔父

(上)

都より一人の年若き教師下り來りて佐伯の子弟に語學教ふること殆ど一年、秋の中頃來りて夏の中頃去りぬ。夏の初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、榎と呼ぶ港の岸に移りつ、こゝより校舎に通ひたり。斯くて海邊にとゞまること一月、一月の間に言葉かはす程の人識りしは片手にて數ふるに足らず。其重なる一人は宿の主人なり。或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もやゝ荒きに、獨を好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げだして涼み居し椽先に來りぬ。夫婦は燈つけんともせず薄暗き中に團扇もて蚊やりつゝ語れり、教師を見て、珍らしやと坐を譲りつ。夕闇の風、輕ろく雨を吹けば一滴二滴、面を拂を三人は心地よげに受けて四面山の話に入りぬ。其後教師都に歸りてより幾年の月日經ち、或冬の夜、夜更

けて一時を過ぎしに獨小机に向ひ手紙認めぬ。そは故郷なる舊友の許へと書き送るなり。其物案じがほなる蒼き色、此夜は頬の邊少し赤らみて折々何處ともなく睥視るまなざし、霧に包まれし或物を定かに視んと願ふが如し。

霧の中には一人の翁立ちたり。教師は筆おきて讀みかへしぬ。讀みかへして目を閉ぢたり。眼、外に閉ぢ内に開けば現れしはまた翁なり。手紙の中に曰く『宿の主人は事もなげに此翁が上を語りぬ。げに珍からぬ人の身の上のみ、かゝる翁を求めんには山の蔭、水の邊、國々には澤なるべし。されどわれいかで此翁を忘れ得んや。余には此翁たゞ何者をか秘め居て誰一人開く事叶はぬ箱の如き思す。こは余が例の怪しき意の作用なるべき歟。さもあらばあれ、われ此翁を懷ふ時は遠き笛の音きゝて故郷戀ふる旅人の情、動きつ、又は想高き詩の一節讀み了はりて限りなき大空を仰ぐが如き心地す』と。

されど教師は翁が上を委しく知れるにあらず。宿の主人より聞き得しは其あらましのみ。主人は何故に此翁の事を斯くも聞きたゞざるゝか、教師が心解し兼ねたれど問はるゝまゝに語れり。

『此港は佐伯町に恰好かるべし。見給ふ如く家といふ家幾千ありや、人數は二十にも足らざるべく、淋しさは何時も今宵の如し。されど源叔父が家一軒たゞ此磯に立ちし其以前の叙

さを想ひ給へ。渠が家の横なる松、今は幅廣き道路の傍に立ちて夏は涼しき蔭を旅人に借ど十餘年の昔は沖より波寄せて節々其根方を洗ひぬ。城下より來りて源叔父の舟頼まんのものは海に突出し巖に腰を掛けし事しばしなり、今は火藥の力もて危き崖も裂かれたれど。

『否、渠とてもいかで初より獨暮さんや。』

『妻は美しかりし。名を百合と呼び、大入島の生なり。人の噂を半偽と見るも、此事のみは信なりと源叔父が或夜酒に吞まれて語りしを聞けば、彼の年二十八九の頃、春の夜更けで妙見の燈も消えし時、ほとくと戸たたく者あり。源起きいで誰れぞと問ふに、島まで渡し玉へといふは女の聲なり。傾きし月の光にすかし見れば兼て見知りし大入島の百合といふ小娘にぞありける。』

『その頃渡船を業となすもの多きうちにも、源が名は浦々にまで聞えし。そは心たしかに俠氣ある若者なりしが故のみならず、別に深き故あり、げに君にも聞かし度きは其頃の源が聲にぞありける。人々は彼が櫓こぎつゝ歌ふを聴かんとて撰びて彼が舟に乗りたり。されど言葉少なきは今も昔も變らず。』

『島の少女は心ありて斯く晩くも源が舟頼みしか、そは高きより見下し給ひし妙見様ならでは知る者なき秘密なるべし。舟とめて互に何をか語りしと問へど、酔ふても言葉少なき

彼はたゞ額に深き二條の皺寄せて笑ふのみ、其笑は何處となく悲しげなるぞうたてき。

『源が歌ふ聲牙えまざりつ。斯くて若き夫婦の幸しき月日は夢よりも淡く過ぎたり。獨子の幸助七歳の時、妻ゆりは二度目の産重くして遂にみまかりぬ。城下の者にて幸助を引取り、ゆく／＼は商人に仕立てやらんと言ひいでしがありしも、可愛き妻には死別れ、更に獨子と離るゝは忍び難しとて辭しぬ。言葉少き彼は此頃より愈々言葉少くなりつ、笑ふことも稀に、櫓こぎにも酒の勢ならでは歌はず、醍醐の入江を夕月の光碎きつゝ朗らかに歌ふ聲さへ哀をそめたり、こは聞くものゝ心にや、あらず、妻失ひし事は元氣よかりし彼が心を半ば碎き去りたり。雨のそぼ降る日など、淋しき家に幸助一人をのこし置くは不憫なりとて、客と共に舟に乗せゆけば、人哀れがりぬ。されば小供への土産にと城下にて買ひし菓子袋開きて此孤兒に分つ母親も少からざりし。父は見知らぬ風にて禮も言はぬが常なり、これも悲しさの餘なるべしと心にとむる者なし。』

『斯くて二年過ぎぬ。此港の工事半ば成りし頃吾等夫婦、島より此處に移りて此家を建て今の業をはじめぬ。山の端削りて道路開かれ、源叔父が家の前には今の車道でき、朝夕二度に漁船の笛鳴りつ、昔は網だに干さぬ荒磯は忽ち今の様と變りぬ。されど源叔父が渡船の業は昔のまゝなり。浦人島人乗

せて城下に往來すること前に變らず、港開けて車道でき人通り繁くなりて昔に比ぶれば此處も浮世の仲間入りせしを渠はうれしとも將た悲しとも思はぬ様なりし。

『斯くて又三年過ぎぬ。幸助十二歳の時、子供等と海に遊び、誤りて溺れしを、見てありし子供等、畏れ逃げて此事を人に告げざりき。夕暮になりて幸助の歸り來ぬに心づき、驚きて吾等も共に搜せし時は言ふまでもなく事遅れて、哀れの骸は不思議にも源叔父が舟底に沈み居たり。』

『渠は最早や決してうたはざりき。親しき人々にすら言葉かはすことを避くるやうになりぬ。物言はず、歌はず、笑はずして年月を送るうちには如何なる人も世より忘れらるゝ者と見えたり。源叔父の舟こゝ事は昔に變らねど、浦人等は源叔父の舟に乗りながら源叔父の世に在ることを忘れしやうになりぬ。斯く語る我身すらをり／＼源叔父が彼の丸き眼を半ば閉ち槽擔ひて歸り來るを見る時、源叔父はまだ生きてあるよなど思ふことあり。渠は如何なる人ぞと問ひ玉ひしは君が初めなり。』

『さなり、呼びて酒吞ませなば遂には歌ひもすべし。されど其歌の意解し難し。否、渠はつぶやかず、繰言ならべず、ただをり／＼太き嘆息するのみ。あはれとおぼさずや——』
宿の主人が教師に語りしはこれに過ぎざりし。教師は都に歸りて後も源叔父が事忘れず、燈下に坐りて雨の音きく夜な

ど、思ひはしば／＼此あはれなる翁が上に飛びぬ。思へらく、源叔父今是如何、彼の音きゝつゝ古き春の夜の事思ひて獨り爐の傍に丸き目ふさぎてやあらん、或は幸助が事のみ思ひつゞけてや居らんと。されど教師は知らざりき、斯く想ひやりし幾年の後の冬の夜は翁の墓に雲降りつゝありしを。

年若き教師の、詩讀む心にて記憶のページ繰へしつゝある間に、翁が上には更に悲しき事起りつ、既に此世の人ならざりしなり。斯くて教師の詩は其最後の一節を欠きたり。

(中)

佐伯の子弟が語學の師を桂港の波止場に送りし年も暮れて翌年一月の末、或日源叔父は所用ありて晝前より城下に出でたり。

大空曇りて雪降らんとす。雪は此地に稀なり、其日の寒さ推て知る。山村水廊の民、河より海より小舟泛べて城下に用を便するが佐伯近在の習慣なれば番匠川の河岸には何時も渡船集ひて乗るもの下るもの、浦人は歌ひ山人はのゝしり、最と賑々敷けれど今日は淋びしく、河面には連た灰色の雲の影落ちたり。大通何れもさび、軒端暗く、往來絶え、石多き横町の道は水れり。城山の麓にて撞く鐘雲に響きて、屋根瓦の苔白き此町の終より終へと物哀しげなる音の漂ふ様は魚住ぬ湖水の眞中に石一個投げ入れたる如し。

祭の日などには舞臺据ゑらるべき廣辻あり、貧しき家の兒等血色なき顔を曝して戯れず、懷手して立てるもあり。此處に來かゝりし乞食あり。小供の一人『紀州々々』と呼びしが振向きもせて行き過さんとす。打見には十五六と思はる、蓬なす頭髮は頸を被ひ、顔の長きが上に頬肉こけたれば領の骨尖れり。眼の光濁り蹠動くこと遅く何處ともなく睥視するまなざし鈍し。纏ひしは袷一枚、裾は短く襠褌下り濡れしまゝ僅に脛を隠せり。腋よりは蟋蟀の足めきたる眩現はれつ、わなわなと戰慄ひつゝゆけり。此時又彼方より來かゝりしは源叔父なり。二人は辻の眞中にて出遇ひぬ。源叔父は其丸き目睨りて乞食を見たり。

『紀州』と呼びかけし翁の聲は低けれども太し。

若き乞食は其鈍き目を顔と共にあげて、石などを見るやうに源叔父が眼を見たり。二人は暫時目と目見合はして立ちぬ。

源叔父は袂をさぐりて竹の皮包取出し握飯一つ撮みて紀州

懷より碗をだしてこれを受けぬ。

與へしものも言葉なく呟けしものも言葉なく、互に嬉れしとも憐とも思はぬやうなり、紀州はそのまゝ行き過ぎて後振向きもせず、源叔父は其餘影角をめぐりて見えざるまで目送りつ、大空仰げば降るゝもなしに降りくるは雪の二片三片なり、今一度乞食のゆき一方を見て太き溜息せり。小供等は笑

を忍びて眩つき合へど翁は知らず。

源叔父家に歸りしは夕暮なりし。渠が家の窓は道に向へど開かれしことなく、さなきだに闇きを燈つけず、爐の前に坐り指太き兩手を顔に當て、首を垂れて嘆息つきたり。爐には枯枝一捆くべあり。細き枝に蠟燭の焰ほどの火燃え移りて代るゝ消へつ燃えつす。燃ゆる時は一間の中暫時明し。翁の影太く壁に映りて動き、煤けし壁に浮びいつるは錦繪なり。幸助五六歳のころ妻の百合が里歸りして貰ひ來しを其時粘りつけしまゝ十年餘の月日經ち今は薄墨塗りしやうなり、今宵は風なく波音聞えず。家を轉りてさら／＼と私語く如き物音を翁は耳をばだて、聴きぬ。こは寔の音なり。源叔父は暫時此さびしき音に聞入りしが、太息して家内を見まほしぬ。

豆洋燈つけて戸外に出れば寒さ骨に沁むばかり、冬の夜寒むに櫓こぐをつらしとも思はぬ身ながら粟だつを覺えき。山黒く海暗し。火影及ぶ限りは雪片きらめきて降るが見ゆ。地は堅く氷れり。此時若き男二人物語りつゝ城下の方より來しが、燈持ちて門に立てる翁を見て、源叔父よ今宵の寒は如何にといふ。翁は、さなりとのみ答へて目は城下の方に向へり。

やゝ行き過ぎて若者の一人、何時もながら源叔父の今宵の様は如何に、若き女彼顔を見なば其儘氣絶やせんと囁けば相手は、明朝あの松が枝に翁の足のさがれるを見出さんぞ知れず

といふ、二人は身の毛の彌堅つを覺えて振向けば翁が門には最早燈火見えざりき。

夜は更けたり。雪は曇と變り曇は雪となり降りつ止みつ。難山の端を月はなれて雲の海に光を包めば、古城市はさながら乾ける墓原の如し。山々の麓には村あり、村々の奥には墓あり、墓は此時覺め、人は此時眠り、夢の世界にて故人相まみえ泣きつ笑つ。影の如き人今しも廣辻を横りて小橋の上をゆけり。橋の袂に眠りし犬頭をあげて其後影を見たれど吠へず。あはれ此人墓よりや脱け出でし。誰に遇ひ誰れと語らんとて斯はさまよふ。渠は紀州なり。

源叔父の獨子幸助海に溺れて失せし同年の秋、一人の女乞食日向の方より迷來て佐伯の町に足をとめぬ。伴ひしは八歳ばかりの男子なり。母は此子を連れて家々の門に立てば、貰物多く、此地の人の慈悲深きは他國にて見ざりし程なれば、子の爲に行末よしやと思ひはかりけん、次の年の春、母は子を残して何處にか影を隠したり。太宰府訪でし人歸來ての話に、彼の女乞食に肖たるが襤褸着し、力士に伴ひて鳥井の傍に袖乞ひするを見しといふ。人々皆な思ひ當る節なりといへり。町の者母の無情を憎み残されし子をいや増してあはれがりぬ。斯くて母の計當りしと見えし。あらず、村々には寺あれど人々の慈悲には限あり。不憫なりとは語りあへど、眞面目に引取りて未永く育てんといふものなく、時には

庭先の掃除など命じ人らしく扱ふものありしかど、永くは續かず。初は童母を慕ひて泣きぬ、人々物與へて慰めたり。童は母を思はずなりぬ、人々の慈悲は童をして母を忘れしめたるのみ。物忘れする子なりともいひ、白痴なりともいひ、不潔なりともいひ、盗すともいふ、口實は様々なれど此童を乞食の境に落しつくし人情の世界の外に葬りし結果は一つなりき。

戯れにいろは教ふればいろはを覺え、戯れに讀本教ふれば其一節二節を誦誦し、小供等の歌聞て又歌ひ、笑ひ語り戯れて、世の常の子と變らざりき。げに變らず見えたり。生國を紀州なりと童の言ふがまゝに『紀州』と呼びなされて、はては佐伯町附屬の品物の様に取扱はれつ、街に遊ぶ子は此童と共に育ちぬ。斯くて渠が心は人々の知らぬ間に亡び、人々は渠と朝日照り炊煙棚引き親子あり夫婦あり兄弟あり朋友あり涙ある世界に同居せりと思へる間、渠は何時か無人の島に其淋しき渠を移し此處に其心を葬りたり。

渠に物與へても禮言はずなりぬ。笑はずなりぬ。渠の怒りしを見んは難く渠の泣くを見んは容易からず、渠は恨みも喜びもせず。たゞ動き、たゞ歩み、たゞ食ふ。食ふ時傍より甘きやと問へばアクセント無き言葉にて甘しと答ふ其聲は地の底にて響くが如し。戯れに棒振りあげて渠の頭上に翳せば、笑ふごとき面持してゆるやかに歩を運ぶ様は主人に叱ら

れし犬の尾振りつゝ逃ぐるに似て異り、渠は決して媚を人にさへげず。世の常の乞食見て憐れと思ふ心もて渠を憐れといふは至らず。浮世の波に漂ふて溺るゝ人を憐れと見る眼には渠を見出さんこと難かるべし、渠は波の底を這ふものなれば。紀州が小橋を彼方に渡りてより間もなく廣辻に來かゝりて四邊を見廻すものあり。手には小さき絃燈揚げたり。絃燈の光射す口を彼方此方と轉らす毎に、薄く積みし雪の上を未廣がりし火影走りて雪は美しく閃き、辻を圍る家々の暗き軒下を丸き火影飛びぬ。此時本町の方より突如と現はれしは巡查なり。づか／＼と歩み寄りて何者ぞと聲かけ、燈をかゝげて此方の顔を照しぬ。丸き目、深き皺、太き鼻、逞ましき舟子なり。

『源叔父ならずや、巡查は呆れし様なり。』

『さなり、』噴れし聲にて答ふ。』

『夜更けて何者をか搜す。』

『紀州を見給はざりしか。』

『紀州に何の用ありてか。』

『今夜は餘りに寒ければ家に伴はんと思ひはべり。』

『されど渠の寢床は犬も知らざるべし、自ら風ひかぬがよし。』

情ある巡查は行きざりぬ。

源叔父は嘆息つきつゝ小橋の上まで來しが、火影落ちし處に

足跡あり。今踏みしやうなり。紀州ならで誰か此雪を洗足のまゝ歩まんや。翁は小走に足跡向きし方へと馳せぬ。

(二下)

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知れ渡り、傳へきゝし人初は眞とせず次に呆れ終は笑はぬものなかりき。此二人が差向ひにて夕餉に就く様こそ見たけれなど滑稽芝居見まほしき心にて嘲る者もありき。近頃は有るか無きかに思はれし源叔父又もや人の噂にのぼるやうになりつ。

雪の夜より七日餘り経ちぬ。夕日影あざやかに照り四國地遠く波の上に浮びて見ゆ。鶴見崎の邊眞帆片帆白し。川口の洲には千鳥飛び。源叔父は五人の客乗せて解かんとす、二人の若者駆け來りて乗りこめば舟には人滿ちたり。島にかへる娘二人は姉妹らしく、頭に手拭かぶり手に小さき包持ちぬ。残り五人は浦人なり。後れて乗りこみし若者二人の外の三人は老夫婦と連の小兒なり。人々は町の事のみ語りあへり。芝居の事を若者の一人語りいでし時、この度のは衣裳も格別に美しき由島には未だ見物せしもの少けれど噂のみはいと高しと姉なる娘いふ。否さまでならず、たゞ去年のものには少く優れりと打消すやうにいふは老婦なり。俳優の中に久米五郎とて稀なる美男まじれりてふ噂島の娘等が間に高しときゝぬ、いかにと若者姉妹に向て言へば二人は顔赤らめ、老

婦は大聲に笑ひぬ。源叔父は櫓こぎつゝ眼を遠き方にのみ注ぎて、此處にも浮世の笑聲高きを空耳に聞き、一言も雜へず。

『紀州を家に伴へりと聞きぬ、信にや。』若者の一人、何をか思ひ出て問ふ。

『さなり。』翁は見向きもせずで答へぬ。

『乞食の子を家に入れしは何故ぞ解し難しと怪むもの少からず、獨は餘りに淋しければにや。』

『さなり。』

『紀州ならずとも、共に住む程の子島にも浦にも求めんには必ず有るべきに。』

『げに然り。』と老婦口を入れて源叔父の顔を見上げぬ。源叔父は物案じ顔にて暫時答へず。西の山懷より眞直に立のぼる煙の末の夕日に輝きて眞青なるを見視しやうなり。

『紀州は親も兄弟も家も無き童なり、我は妻も子もなき翁なり。我渠の父とならば、渠我の子となりなん、共に幸ならずや。』獨語のやうに言ふを人々心のうちに驚きぬ、此翁が斯く滑らかに語りいでしを今迄聞きしことなければ。

『げに月日經つことの早さよ、源叔父。ゆり殿が赤兒抱きて磯邊に立てるを視しは、われには昨日の様なる心地す。』老婦は嘆息つきて、

『幸助殿今無事ならば何歳ぞ』と問ふ。

『紀州よりは二ツ三ツ上なるべし。』さりげなく答へぬ。

『紀州の歳ほど推し難きはあらず、垢にて歳も埋はてしと覺ゆ、十にや將十八にや。』

人々の笑ふ聲暫時止まざりき。

『われも能は知らず、十六七とかいへり。』生の母ならで定に知るものあらんや、哀とおぼさずや。『翁は老夫婦が連れし七歲計の孫とも思はるゝ兒を見かへりつゝ言へり。其聲さへ震へるに、人々氣の毒がりて笑ふことを止めつ。』

『げに親子の情二人が間に發らば源叔父が行未樂しかるべし、紀州とても人の子なり、源叔父の歸り遅しと門に待つやうなりなば涙流すものは源叔父のみかは。』夫なる老人の取繕ひげにいふも眞意なきにあらず。

『さなり、げに其時はうれしかるべし。』と答へし源叔父が言葉には喜充ちたり。

『紀州連れて此度の芝居見る心はなきか。』斯く言ひし若者は源叔父を嘲らんとにはあらで、島の娘の笑顔見たきなり。姉妹は源叔父に氣兼ねて微笑みしのみ。老婦は慙たゞき、そは極て面白からんと笑ひぬ。

『阿波十郎兵衛など見せて我子泣かすも益なからん。』源叔父は眞顔にていふ。

『我が子とは誰ぞ。』老婦は素知らぬ顔にて問ひつ、

『幸助殿は彼處にて溺れしと聞きしに。』振り向て妙見の山影黒き邊を指しぬ、人々皆な彼方を見たり。

『我子とは紀州の事なり。』源叔父は暫時こぐ手を止めて彦岳の方を見やり、顔赤めて言放ちぬ。怒とも悲とも恥とも將た喜ともいひわけ難き情胸を衝きつ。足を舷端にかけ櫓に力加へしと見るや、聲高らかに歌ひいでぬ。

海も山も絶えて久しく此聲を聞かざりき。うたふ翁も久しく此聲を聞かざりき。夕風の海面をわたりて此聲の脈ゆるやかに波紋を描きつゝ消えゆくとぞ見えし。波紋は渚を拆てり。山彦は微に應へせり。翁は久しく此應へをきかざりき。

三十年前の我、長き眠より醒めて山の彼方より今の我を呼ぶならずや。

老夫婦は聲も節も昔の如しと賛め、年若き四人は噂に違はざりけりと聴きはれぬ。源叔父は七人の客わが舟に在るを忘れたたり。娘二人を島に揚げし後は若者等寒しとて毛布被り足を縮めて臥しぬ。老夫婦は孫に菓子與へなどし、家の事どもひそくと語りあへり。浦に着きし頃は日落ちて夕煙村を罩め浦を包みつ。歸舟は客なかりき。醍醐の入江の口を出る時彦岳嵐身に滲み、顧れば大白の光輝に碎け、此方には大入島の火影早きらめきそめぬ。靜に櫓こぐ翁の影黒く水に映れり。船軽く浮べば舟底たゞく水音、あはれ何をか囁く。人の眠催す様なる此水音を源叔父は聞くともなく聞きて様々の樂しき事のみ思ひつゞけ、悲しき事、氣がよりの事、胸に浮ぶ時は櫓握る手に力入れて頭振りたり。物を追ひやる

やうなり。

家には待つものあり、渠は爐の前に坐りて居眠りてや居らん、乞食せし時に比べて我家のうちの樂しさ煖かさに心溶け、思ふこともなく燈火打見やりてや居らん、わが歸るを待て夕餉了へしか、櫓こぐ術教ふべしといひし時、うれしげに點頭きぬ、言葉少く絶えず物思はしげなるは此迄の慣なるべし、月日經たば肉付きて頬赤らむ時もあるん、されどされど。源叔父は頭を振りぬ。否々渠も人の子なり、我子なり、吾に習ひて巧にうたひ出る渠が聲こそ聞かまほしけれ、少女一人乗せて月夜に舟こぐ事もあらば渠も人の子なり其少女再び見たき情起さでやむべき、われに其の情見ぬく眼あり必らず他所には見じ。

波止場に入りし時、翁は夢みる如きまなざしして間屋の燈火、影長く水にゆらぐを見たり。舟繋ぎ了れば臥席巻きて腋に抱き櫓を肩にして岸に上りぬ。日暮れて間もなきに間屋三軒皆な戸ざして人影絶え人聲なし。源叔父は眼閉ちて歩み我家の前に來りし時、丸き眼睜りて四邊を見廻はしぬ。

『我子よ今歸りしぞ。』と呼び櫓置く可き處に櫓置きて内に入りぬ。家内暗し。

『これは如何に、わが子よ今歸りぬ、早く燈點けずや。』寂として應なし。

『紀州々々。』竈馬のふつとかに叩くあるのみ。

翁は狼狽^{わうたい}て懷中^{かいちゆう}よりまづち取出し、一摺^{いちしやく}すれば一間のうち俄に明くなりつ、人らしき者見え、暫時^{しばらく}して又暗し。陰森^{いんしん}の氣床^{きふた}下より起りて翁が懷に入りぬ。手早く豆洋燈^{まうやうとう}に火を移し四邊を見廻はすまなざし鈍く、耳そばたて、「我子よ。」と呼びし聲^{こゑ}腹^{はら}れて呼吸も迫りぬと覺し。

爐には灰白く冷え夕餉^{ゆふくわ}たべしあとになし。家内^{かうち}捜すまでもなく、たゞ一間の裡を翁はゆるやかに見廻はしぬ。煤^{すす}し壁の四隅は光屈き兼つ心ありて見れば、人あるに似たり。源叔父は顔を兩手に埋め深き嘆息^{たんいき}せり。此時もしやと思ふ事胸を衝きしに、つと起てば大粒の涙流れて頬をつたふを拭はんとはせず、柱に掛けし絃燈^{せんとう}に火を移していそがしく家を出で、城下の方指して走りぬ。

蟹田^{かにだ}なる鍛冶^{かや}の夜業^{よなぐさ}の火花闇に散る前を行過んとして立どまり、日暮のころ紀州此前を通らざりしかと問へば、氣つかざりしと槌持てる若者の一人答へて訝^{いぶか}しげなる顔す。こは夜業^{よなぐさ}を妨げぬと笑面^{えおほ}作りつ、又急ぎゆけり。右は畑、左は堤の上を一行に老松並ぶ眞直の道を半ば來りし時、行先をゆくものあり。急ぎて燈火^{とうし}さし向くるに後姿紀州にまぎれなし。渠は兩手を懷にし、身を前に屈めて歩めり。

『紀州ならずや。』呼びかけて其肩に手を掛けつ、『獨り何處に行かんとはする。』怒、はた喜、はた悲、はた限りなき失望をたゞ此一言に包みしやうなり。紀州は源叔父が

顔見て驚きし様もなく、道ゆく人を門に立ちて心なく見やる如き様にて打守りぬ。翁は呆れて暫時^{しばらく}言葉なし。

『寒からずや、早く歸れ我子。』いひつゝ紀州の手取りて連れ歸りぬ。みち／＼源叔父は、わが歸りの遅かりしゆゑ淋しさに堪へざりしか、夕餉^{ゆふくわ}は戸棚に調へ置きしものをなどいひいひ行けり。紀州は一言もいはず、生憎^{なまじ}に嘆息^{たんいき}もらすは翁なり。

家に歸るや、爐に火を盛に燃て其傍に紀州を坐らせ、戸棚より膳取出して自身は食はず紀州にのみたべさす。紀州は翁の言ふがまゝに翁のものまで食ひ盡しぬ。其間源叔父はをりをり紀州の顔見ては眼閉ぢ嘆息^{たんいき}せり。たべ了りなば火にあたれといひて、うまかりしかと問ふ紀州は眠氣^{めいき}なる眼にて翁が顔を見て微^{かすか}にうなづきしのみ。源叔父は此様見るや、眠くば寢よと優しくいひ、自から床敷きて蒲團かけて遣りなどす。紀州の寢^い後、翁は一人爐の前に坐り、眼を閉ぢて動かず。爐の火燃えつきんとすれども柴くべず、五十年の永き年月を潮風にのみ晒せし顔には赤き焰の影覺束なく漂へり。頬を連ひてきらめくものは涙なるかも。屋根を渡る風の音す、門に立てる松の梢を嘯^{うそが}きて過ぎぬ。

翌朝^{あした}早く起きいでゝ源叔父は紀州に朝飯たべさせ自分は頭重く口渇^{くわ}きて堪へ難しと水のみ飲みて何も食はず。暫時^{しばらく}して此熱を見よと紀州の手取りて我額に觸れしめ、少し風邪